

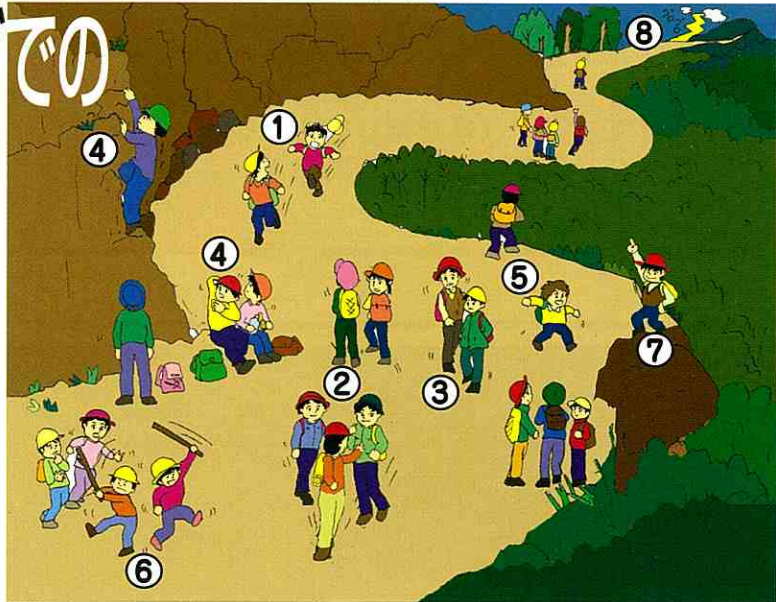
どこにどのような危険があるか考えてみよう

キャンプ中にハイキングに行くことがあります。この場面は、ハイキングの一コマです。家族や仲間同士で、楽しそうにハイキングしていますが、事故につながる危険な行動も見受けられます。どこにどのような危険があるか、みんなで考えてみましょう。

7 ハイキングでの危険



7. ハイキングでの危険



ここが危険！

① 子どもがハイキング道
を走って下っている

子ども二人がハイキングコースの坂道を走って下っています。疲れもなく元気なことはよいのですが、ハイキング道は平坦な道ばかりではありません。下りの坂道は走るとスピードがつき、転んだり人とぶつかってしまう危険があります。

その他にも、勢いあまって曲がり道を曲がりきれずに転落する危険もあります。歩いているときは違ってスピードがついている分、怪我や事故の程度も大きくなります。この場面では、前を走っている子どもが後ろの友達を見ながら、よそ見をしていますが大変危険です。事前に注意しておきましょう。



② 話をしながら歩いている
話をしてながら後ろ向き

仲間と楽しく話をしながらハイキング道を下っています。楽しく話をしながら歩くのはよいのですが、足元に注意しなければ、つまずいたり転倒したりして危険です。

この場面のように、下り道を後ろ向きで歩くのはとくに危険です。狭い道では足を踏み外して崖から落ちるといことも考えられます。

ハイキング道では足元に注意しながら、前方をしっかり見て歩くことを心がけましょう。



③ ポケットの中に両手を
入れて歩いている

ハイキング道を下っている子どもが、ポケットの中に両手を入れて歩いています。子どもの近くにいる大人が、ポケットから手を出して歩くように注意をしているのでしょうか。

両手をポケットの中に入れて歩いていると、石につまずいたり木の根に引っかかるなどして転倒したときに両手をつくことが出来ず、顔などに大怪我を負ってしまいます。歩くときには、常に両手が自由に使えるようにしておきましょう。



④ ハイキング道の山側を
よじ登っている



いっしょに来ていた仲間と休憩していたのですが、そのうちの一人が山側の切り立ったところを登ろうとしています。このような場所では、登る途中で本人が滑り落ちたり、落石を誘発して下にいる仲間へケガをさせる危険があります。

休憩しているとはいえ、子どもはちょっとからだを休めると何かをしたくなるものです。ハイキング道では、こうした行動の他に落ちていた石を拾って、谷側の方に投げたりすることもよく見られます。しかし、ハイキングコースでは、どこに人がいるかわからないので投石などは厳禁です。

⑥ ハイキング道で子どもが棒を振り回して
遊んでいる

子どもがハイキング道で棒を振り回しています。元気なのは良いとしても、近くを歩いている人に当たったり手からすっぽ抜けたりして、他の人にケガをさせる危険があります。

このような危険を避けるために、子どもを引率する場合には、事前に他の人に迷惑をかけないように注意するとともに、ハイキング中にも十分注意をするようにしましょう。



⑧ 山の頂上付近で雷が鳴っている

山の頂上付近に雷雲が発生し、雷が鳴っています。まだ、この場面では雨は降り出していないようです。やがて雷雲が近づいてきて雨や雷になるでしょう。このままハイキングを続けると雨に降られるだけでなく、落雷の危険もあります。落雷の危険は、雷鳴が聞こえる範囲といわれています。このような天気には、すぐにハイキングを中止して下山しましょう。

ハイキングに出かけるときには、事前に気象情報で天気を確認し、大雨や雷の予報が出ているときには、無理をせずに中止しましょう。その地方の天気については、地元の人やキャンプ場の管理者に尋ねることも有効です。



⑤ 無帽で歩いている



この子どもは帽子をかぶっていないので日射病が心配されます。日射病を防ぐ上で帽子は欠かせません。ハイキング中の事故の中には、帽子をかぶっていないことが原因で、日射病になった例が多くみられます。帽子はその他にも、ちょっとした落下物から頭を守ったりすることにも有効です。野外では危険や疾病から身を守るために、必ず帽子をかぶりましょう。

⑦ 道端にある岩に上がっている

コースの途中に、手ごろな岩があると、つい上がってみたいくなるものです。

この場面のようにハイキング道の端で、それも谷側にある岩に上がるのは危険です。岩が雨上がりで濡れていたり、コケが生えていて滑りやすくなっているかもしれない。また、履いている靴が滑りやすいかもしれません。

岩の上で過って滑り、谷側の崖のほうにでも落ちると重大事故になりかねません。安易に岩などに上がることは危険ですので気をつけましょう。



どこにどのような危険があるか考えてみよう

子どもたちが川遊びをしています。楽しそうに遊んでいるからといって
安心はできません。よく見ると危険な遊びをしている子どももいます。こ
のままでは事故につながりかねない状況があります。
どこにどのような危険があるか、みんなで考えてみましょう。

8 川遊びでの危険



8. 川遊びでの危険



ここが危険!

① 石伝いに川を渡ったり、跳んだりしている

水面から出ている石の上を伝って、川を渡ったり、跳んだりしている子どもがいます。川の中の石は、濡れていたり、コケ等で滑りやすくなっています。このため石の上でバランスを崩して転び、頭や腰などをぶつけて大怪我をする危険があります。また、水の中を歩くときにも、川底にある石は、滑りやすくなっていたり、グラグラしているものがあって危険です。川の中では安全を確かめながらゆっくり歩きましょう。



② 岩の上から飛び込もうとしている

今にも岩の上から川に飛び込もうとしています。岩は水面に出ている岩もあれば、水中に隠れている岩もあります。また、水中には大きな石もあります。飛び込んで頭をぶついたり、飛び込む前に岩から滑り落ちて大怪我をすることもあります。川の中に飛び込むのは危険です。また、飛び込む位置が高くなればなるほど、危険性が増すことになります。子どもが岩の上にいるときには、様子を見守り飛び込まないように注意しましょう。



③ ヤスを振り回している

魚でも捕ろうとしているのでしょうか、ヤスを持って川の中に入っています。魚を捕ろうとするのはよいのですが、ヤスを振り回して危険です。近くを見ると他の子どもたちも遊んでおり、振り回しているヤスの先端部が当たったり刺さったりすると大怪我をします。ヤスのような先の鋭い物を扱うときには、事前に事故につながることを知らせるとともに、安全な扱い方について教えておく必要があります。



④ ばで大人が立ち話をしている子どもが川遊びをしている

川の中で子どもたちが楽しそうに遊んでいますが、そのそばで子どもたちの様子を見守っていない大人が立ち話をしている、子どもを見ていません。川での子どもの事故は、大人が目を見守ったほんの僅かな間に起きています。浅い川だからといって安心はできません。水深が子どもの膝下ぐらいの川であっても、溺れることがあります。このような危険から子どもたちを守るために、川で遊ばせるときには事前に水流や川底の状態、水深などについて調べ安全を確認しておく必要があります。また、川遊びをしている間は、その近くで片時も目を離さず見守るとともに、危険な遊びや行動については、その都度注意するようにしましょう。



⑤ 川の中に石を投げている

川に向かって石投げをして遊んでいる子どもがいます。川の中では子どもがたくさん遊んでいて、投げた石が遊んでいる子どもに当たって怪我をすることも十分考えられます。このような場所で、石を投げて遊ぶことは危険です。石投げをするときには、川の中に誰もいない安全な場所で、しかも1回ごとに人がいないことを確認して投げるようにしましょう。



⑥ 遊んでいる子どもの足元に割れたビンがごろごろしている

河原で遊んでいる子どもの足元に、割れたビンやガラスの破片が散乱しています。遊びに夢中になって、素足で割れたビンやガラスの破片を蹴飛ばしたり、破片を踏みつけると、足に切り傷を負ったりビンの破片が突き刺さるなどの危険があります。河原には、その他にも危険物があります。河原で遊ぶときには、事前に“危険物”を取り除いておきましょう。また、安全のために、河原や川の中で遊ぶときには、運動靴などを履くようにしましょう。



どこにどのような危険があるか考えてみよう

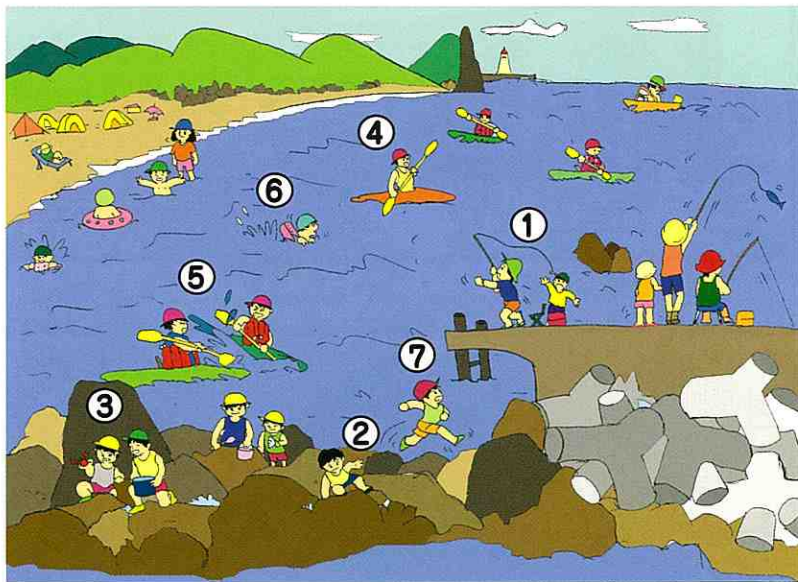
この場面は、海辺でキャンプしているときに見られる光景です。楽しそうにいろいろな活動をしているますが、事故につながる危険な遊びや行動も見られます。
どこにどのような危険があるか、みんなで考えてみましょう。

9 海辺での危険



9. 海辺での危険

ここが危険！



① 釣りをしている子どもが釣っている

桟橋で釣りをしていますが、釣りをしている人のすぐそばで、幼い子どもが釣りをしています。このような状況で誤って釣り針を子どもに引っ掛けてしまう事故がよく発生します。

針の引っ掛かる部位によっては、大きな怪我につながります。このような危険は子どもに限らず、大人にも言えることです。釣りをするときには、このような危険があることを子どもに教え、大人も十分気をつけなければなりません。

また、釣りをする人もこのような危険を防ぐために、周囲の安全を確認する必要があります。



② 無帽で磯遊びをしている

磯遊びをしている子どもの中に、帽子をかぶっていない子がいます。夏の炎天下で、長い時間にわたって帽子をかぶらないでいると、日射病になる危険があります。

日射病を予防するには、子どもが気をつけるだけでなく大人も常に気を配らなければなりません。

磯遊びや砂浜で遊ぶときだけでなく、日差しが強いときには、必ず帽子をかぶらせ、こまめに水分補給をすることが大切です。



③ 素手で磯の生物や貝をとっている



磯の生物は、カニのようにハサミで挟むものや、刺すもの、刃物のような先端をもつ貝類など危険なものがいっぱいです。このような生物を観察したり採取するときは、直接手を触れないで、採取する道具や軍手などを準備することが大切です。

④ フローティングジャケットを身につけずにカヌーに乗っている

カヌーを楽しんでいる人がいますが、一人だけフローティングジャケットを着けていません。沖に出ないから、浅瀬だから、自信があるから…と、フローティングジャケットを着けない理由がいろいろあるでしょう。しかし、他のカヌーが接近して来たのを避けようとしてバランスを崩して転覆したり、風で沖に流されて転覆するということがあります。

海の事故では、フローティングジャケットを身につけていたか否かで、明暗が分かれています。油断や過信は禁物です。カヌーに乗るときには、必ずフローティングジャケットを身につけましょう。



⑤ カヌー上でふざけあっている

カヌー上で水の掛け合いをしていますが、水の掛け合いがエスカレートしてバランスを崩し、パドルが相手に当たってケガをする危険があります。また、二人の近くに人がいたときには、単に迷惑するだけでなく、周りの人にパドルが当たって怪我をする恐れがあります。カヌーに乗艇しているときには、自分の安全だけでなく他のカヌーや泳いでいる人に迷惑がかけられないよう配慮を忘れないようにしましょう。



⑥ 子どもが一人で沖に向かって泳いでいる

浮き輪を使って泳いでいる子どもが、一人で沖に向かって泳いでいます。浜辺の方で遊んだり泳いでいる子どもには、大人が付き添って見守っていますが、沖の方に向かって泳いでいる子どもにまで目が行き届いていません。このままでは沖に流されたり、高波によって溺れる危険があります。

子どもが水遊びや泳いでいるときなど、どんな場合でも、大人は子どもから片時も目を離さないようにしなければなりません。浮き輪をつけているからといって、安心は禁物です。



⑦ 子どもが岩の上を跳びながら渡っている

この子どもはどこへ行こうとしているでしょうか、岩の上を跳んで渡っています。海辺にある岩は、波や潮の干満で濡れて滑りやすくなっており危険です。

このように滑りやすくなっている岩は、歩いて渡るだけでも危険なところですが、この場面のように岩の上を跳んで渡るのは、よりいっそう危険が増します。滑って転ぶと、大怪我をしてしまう危険があります。このような危険を避けるために、子どもに事前に注意するとともに、絶えず子どもの遊びや行動に気を配ることが大切です。



どこにどのような危険があるか考えてみよう

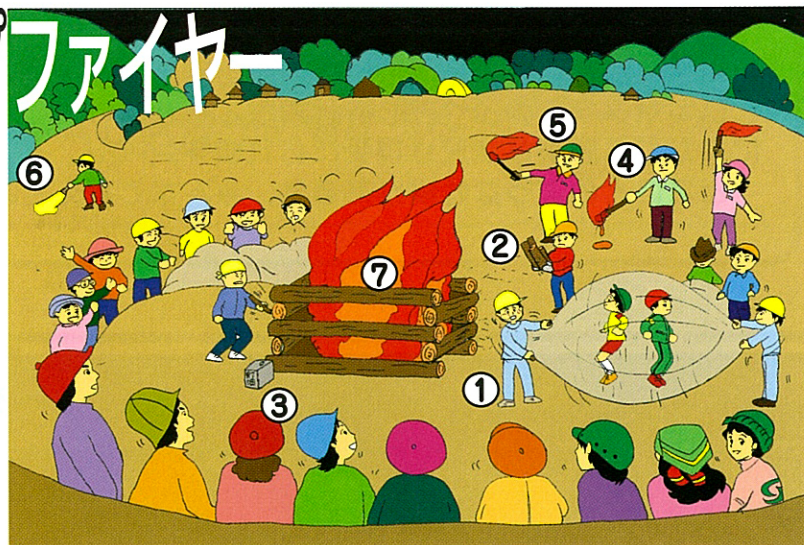
キャンプファイヤーはキャンプの楽しみの一つです。歌ったり、踊ったり、ゲームなどをして楽しいひと時を過ごすことができます。しかし、楽しいキャンプファイヤーにも危険なことがあります。この場面には、事故につながる危険な状況が見受けられます。
どこにどのような危険があるか、みんなで考えてみましょう。

10 キャンプファイヤーでの危険



10. キャンプファイヤー での危険

ここが危険！



① 出し物を演じている一人が燃えている井桁に近づきすぎている

班の出し物で“ダブルタッチ”をしているようです。縄を持っている一人が燃えている井桁を背に立っていて、火の粉や炎で火傷を負う危険があります。キャンプファイヤーでは、このような出し物を演じるときや踊ったりゲームをするとき、つい夢中になってしまい、燃えている井桁に近づき過ぎて火傷を負うことがあります。

このような事故を防ぐためには、本人自身が気をつけることは当然ですが、気がついた人がすぐに注意する事が重要です。

また、井桁を組むときに、井桁の周りを囲むように薪などを置いて火に近づきすぎないための目印としておくと、よいでしょう。



② ファイヤーキーパーが風下から井桁の中に薪を入れに行っている

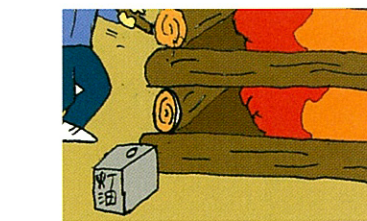
キャンプファイヤーのファイヤーキーパーには、燃えている井桁の火をコントロールするという大切な役割があります。

この場面では、ファイヤーキーパーが風下から燃えている井桁に薪を持って近づいています。風下から井桁に近づくと、炎や火の粉をまともに浴びて大変危険です。

ファイヤーキーパーはこのような危険から身を守るために、必ず風上から井桁に近づくようにします。また、ファイヤーキーパーは火傷防止のために、帽子をかぶり長袖・長ズボンと熱に強い革手袋をつけた服装を整えましょう。



③ 燃えている井桁の近くに灯油缶が置かれている



井桁を組んだときに置き忘れたのでしょうか、燃えている井桁のすぐ近くに灯油缶が置かれています。缶が熱せられて爆発の危険があります。缶が爆発して炎をキャンパーが浴びることになったら大変です。

キャンプファイヤーの準備で井桁を組むなど一通りの作業を終えた後には、井桁の近くに火が燃え移る危険な物などがいないか確認することを忘れないようにしましょう。

④ 灯油が流れ落ちてきているトーチを持っている

次の出し物でトーチを使った演技でもするのでしょうか、トーチを持って立っている人がいます。持っているトーチの先の部分を見ると、トーチに浸した灯油が流れ落ちています。このままトーチを持ち上げ立ると、灯油が手元の方に流れ、火が走り火傷を負う危険があります。

ファイヤーのトーチは、灯油に浸した後、灯油が垂れないようによく搾り取っておくことが大切です。トーチを持つときには、手には火に強い革手袋を必ずつけておきましょう。



⑤ 持ったトーチの炎が風にあおられて顔に向かってきている

火のついたトーチを持ち上げていますが、風にあおられてトーチの炎で顔が火傷しそうになっています。このようなトーチによる火傷を防ぐためには、風の吹く状態や風向きを考えて持たなければなりません。

トーチは必ず風下にして先端を上げて持つようにします。子どもがトーチを持つときには、必ず大人が見守るようにしましょう。そしてトーチを持つときには、革手袋を忘れずにつけましょう。



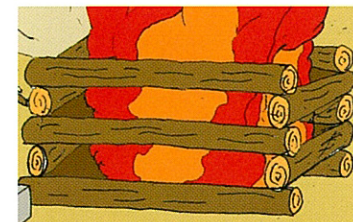
⑥ 一人の子どもがキャンプファイヤー場から離れて山の方に向かって歩いている

キャンプファイヤーに飽きてしまったのでしょうか、一人の子どもが山の方に向かって歩いています。

子どもも大人も一緒になって、キャンプファイヤーを楽しむのはよいのですが、つい夢中になりすぎて全体に目が行き届かなくなってはいけません。この場面に見られるように、まだキャンプファイヤーが続いているのに、その場を離れてしまう子どもがいるかも知れません。単独で行動することは大変危険です。ファイヤー中は一人ひとりの子どもに十分気を配りましょう。



⑦ 組まれている井桁が大きすぎる



キャンプファイヤーで組まれる薪には、いろいろな組み方があります。この場面では、「井桁」で組まれています。ファイヤーの楽しさは、エールマスター（進行係）が作り出す雰囲気もありますが、中央で組まれた井桁が燃える明るさも大切です。

しかし、むやみに大きな火にするのは考え物です。この場面のよう、過ぎる丸太で、大きな井桁を組むことは危険です。

また、自然環境の保護や資源の無駄遣いをなくすためにも、ファイヤーの火は適度な大きさにしましょう。